さざなみ国語教室
第509号　2024年8月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

国語教育に携わって

片桐　宏

「ぼくは　ねこ。なまえのないねこ。だれにも　なまえを　つけてもらったことが　ない。」このような文章から始まるのは、『なまえのないねこ』という絵本。第十二回ＭＯＥ絵本やさん大賞二〇一九で第一位に輝いた絵本だ。竹下文子さんが文、町田尚子さんが絵を描かれている。最初の文に続いて、「まちの　ねこたちは、みんな　なまえを　もっている。」自分には名前がなくて、名前がほしくてたまらない猫。町のいろんな猫の名前の紹介、挙げ句の果ては、犬の名前の紹介。そして、絵本の終盤で、雨の中ベンチの下にうずくまっていると、小さな女の子が、「ねえ。おなか　すいてるの？」と声をかけてくれた。その瞬間、猫は気づく。「そうだ。わかった。ほしかったのは、なまえじゃないんだ。なまえを　よんでくれるひとなんだ。」これだけの話だが、この話にぴったりの絵が何とも言えず猫の気持ちを想像させてくれるし、感動させてくれる。絵本のすばらしいところだ。

大学卒業前の教育実習で、私の指導教官をしていただいた吉永幸司先生と初めて出会わせていただいた。私の免許は理科であるにもかかわらず、国語教育の奥深さやおもしろさに気づかせていただいた先生でもある。そして、教職三十八年間、理科を忘れてひたすら国語教育を頑張り、定年退職を迎えた。

国語教育を頑張ったおかげか、退職後、図書館長をやってほしいという話をいただいた。この図書館長という仕事は、今までの仕事の内容とは随分異なり、また、毎日、本に囲まれた仕事でもあったので、新鮮な気持ちになれた。そして、図書館長をしていた三年間で、私の生活や考え方、ものの見方なども、大きく変わった。

その一つが、新鮮な気持ちになれたからか、多忙感が少なくなり、私の心の中にゆとりにも似た感覚が生まれた。緊張感がなくなったわけではないが、いらいら感が現職の頃より少なくなった。

二つめは、私の読書。現役の頃、私が読んでいた本は、教育関係の本かミステリー本。それが図書館にいる間に、絵本、旅行記、エッセイ、趣味の本と読むジャンルが多岐にわたってきた。特にブックトークなどの関係で絵本を読むことがたいへん多くなった。そして絵本のおもしろさも充分味わうことができた。冒頭に挙げた絵本も私の感動した絵本の一冊である。

三つめに趣味が増えた。現職の頃は趣味といえばスポーツばかりであったが、ミニ盆栽など、図書館の本を参考にして始めてみた。今手元には、六十歳からはじめる植物画、六十歳からはじめる風景スケッチなどがある。

そのようなことを思い起こすと、現職の時、国語教育の一環として、もっともっと子どもたちに絵本をはじめ様々なジャンルの読書を薦めておけばよかったと思う、古希を過ぎたこの頃である。

（元滋賀県小学校国語部会長）

▼次の文は令和６年７月３０日読売新聞朝刊の「学力テスト」記事より引用。「文部科学省は２９日、今年４月に実施した２０２４年度の全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の結果を公表した。中学校の国語は平均正答率が前年度より11、7ポイント低いい58、4％で19年度に現在の出願形式に切り替わって以降最低となった。特に〈読む〉技能を測る問題で正答率が低く、必要な情報を読み取る力に課題が表れた」と報じていた▼小見出しとして「長文・記述式苦手」「読解SNS影響か」「SNSや動画視聴。時間が長いほど成績低下」等の活字が並ぶ▼中学3年生は小学校高学年からコロナ感染症の影響で臨時休校（２０２０年）、その後オンライン授業や学習支援の取り組みが進められてきた時代の人達である。すでに、学校現場でコロナの時代は何もなかったように日常が進んでいる。が、その影響はいろいろ表れている▼これまでも何度か指摘されてきた読解力や文章の作成力の課題があるということは国語学力が、一層、課題になってきたということであろう。「子供たちがSNSや動画ばかり見ている」「短文や絵文字によるコミュニケーションに慣れ、長文の読み書きに苦痛を感じている」という指摘もある▼文章を読み考える力は人間力につながる。端末に親しんできた子供たちに教科書を自力で読み解く力の育成にも期待したい。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

体験と習熟

弓削　裕之

学校生活に慣れることが学びの中心にある１年生の１学期に比べ、２年生のスタートは勢いがある。そのエネルギーを上手く学習へと向かわせた実践に出会った。

第４９回国語研究集団合同研究会にて、さざなみ同人の井上滉斗先生（豊郷町立日栄小学校）のご提案、「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践」（２年光村「こんなもの、見つけたよ」）を拝聴した。生活科での体験的な活動を国語科の学習と関連させた実践だった。具体的には、町探検で見つけたものを紹介する作文を書く活動だ。

１時間目の授業記録は、先生と子どもとのやりとりから始まっていた。「今日は何するん？スイミーの続き？」「今は国語やで。生活じゃないやん」という何気ない言葉から、「何を学ぶか」を意識して授業に臨む子どもたちの姿が見えた。「自分たちで考えたい」が今にも溢れそうなつぶやきに思える。このタイミングで提示された「学習計画すごろく」が、子どもたちの心をつかんだ。学習の中身や順番が、子どもたちの言葉で決まっていく。

教師が明確に伝えたことは、「生活科のゴールと国語科のゴールは別にある」ということ。自分の実践では、この辺りを混同させたまま学習を進めてしまうことが多く、子どもたちが国語科の学びを意識しにくかった。しかし、井上先生の学級の子どもたちは、「先生。文章を書く時間って１回だけ？」と尋ねている。これまでの学習経験を思い出し、１時間で発表原稿を書くことに不安を感じたのかもしれない。「もう少しいる？」という先生の問い返しに、安心した教室の雰囲気が伝わってきた。それぞれの教科の学びを区別しておくことは、教科を横断させるからこそ大切になってくる手立てだと感じた。

２年生の学習は、体験と習熟のバランスが難しい。体験に偏りすぎると国語科としての力がつきにくいが、指導者が習熟を意識しすぎると、せっかくの体験が「できなくて苦労した思い出」に上書きされてしまう。

発表原稿を１人で書くのが不安な子が多かったことから、「組み立てメモ」を友だち同士で見せ合う活動が設定された。交流の中身は、「はじめ・中・おわり」に相応しいメモが配置されているか、メモの数は妥当か、伝えたいこととメモの内容が合っているか、などだった。基本的な確認ではあるが、２年生の子どもたちが言葉を意識するきっかけになる活動としては十分だと思った。これらの「確認」を習熟できずに学年を上がると、自分が書いたものに責任が持てず、他人ごとのように扱ってしまうこともある。

何より素晴らしいのは、教師からその場で赤ペンを入れられたわけでもなく、返却されたらいつの間にかきれいに整っていたわけでもないということ。自分たちで気づき合い、本番まで向かった足跡である。身につけて欲しい力を欲張らなかったことは、体験をかけがえのないものにするための英断だと感じた。

（京都女子大学附属小学校）

批判的な読みで構成に着目する「インターネットは冒険だ」

髙木　富也

説明的文章の指導で大切にしていることは、「批判的な読みを通して内容と形式に着目する」ということだ。今回は、五年生の「インターネットは冒険だ」（東京書籍）の実践を紹介する。

本教材は、インターネットの特徴と危険を知り、それらを理解しておけば、インターネットはいろいろなものに出会う冒険になるだろう、という主張の説明的文章である。正にインターネット社会を生きる現代の児童にとって重要なテーマを扱う教材と言える。指導していく上で、児童の疑問をもとに以下二点の批判的読みを行った。

① 結論は必要か。

児童は、序論と結論が同じだということに着目した。これまでの学びから、序論（問題提起）→本論（事例）→結論（筆者の考え）のような【尾括型】の説明文に慣れている児童にとって、違和感があったようだ。そこで、「では、結論は必要ないですか？」と批判的な問いかけをすると、「大事なことだから二回繰り返したのではないか。」「本論で事例を述べた後だから、もう一度確認の意味で主張を伝え直したのではないか。」というような考えが生まれた。今回のように、序論と結論で同じことを述べる説明文を、【双括型】であるということを指導した。必要性を問うことで、説明文全体の構成に着目することができた。

② 本論二の十段落は、対策について述べていない。

本教材の本論では、事例→特徴→危険→対策の順番を基本構成としている。しかし、本論二の十段落のみ、お金の仕組みに話題転換され、対策について述べられていない。そこで、「本論二の説明は十分でないのではないか？」と批判的な問いかけをした。この発問に児童の意見は割れた。十分だと思う、いや説明が足りないじゃないか、でもどう説明すればいいのか…と話し合いは進み、一人の児童が「おもしろいもの、過激なもので再生数が増え、お金が入るという「仕組みそのもの」は、使用する自分たちには対策の仕様がないのではないか。」と発言し、全員が納得した。構成を批判して終わるのではなく、その意図を考えることで、自分事として事例を捉えることができた。

批判的読みは、決して粗探しをしたいわけではない。批判的読みの観点をもって筆者に立ち向かうことで、力強い読み手に育てていきたい。

（東近江市立能登川南小学校）

全員が考えることを楽しむ

岡嶋　大輔

勤務校で国語の授業を拝見する機会をいただいた。研究授業等ではなく、普段の国語授業を数回参観するという形。

扱う教材文は「まごのかぎ」（光村三年上）。授業が始まると、全員が姿勢良く元気に音読する声が響く。続いて、本文の一部を視写。全員が真剣な表情で鉛筆を走らせる。

その後、授業の展開部分はテンポ良く進む。例えば、中心人物りいこの会話文『お魚に、かぎあなんて。』について、「どのように言ったの。」と先生が問うた場面。発表したい子らが多数起立し、順に自分の考えを話していく。「不思議そうに」「ひとり言のように」「気になる感じで」「目を丸くして」「考えながら」「びっくりして」等々。先生は、それぞれの発言に相づちを打ち、コメントをし、立ち止まって広げたり、素敵な言葉を板書したりする。周りの子も、全員が楽しげに話を聞き、参加している。実際にその会話文を言ってみたり、どのような表情なのかやってみたりするよう促したりと、言葉へのアプローチの仕方も変化に富んでいた。

この一つの会話文についてだけでも、子どもから出される言葉の多さに驚かされたが、その後も、楽しい言葉のやりとりが続く。その楽しさは、表面的なものではなく、あれこれと仲間と言葉を出し合うことによって、新しい言葉や考えに出合ったり、言葉の広がりや深まりを感じたりする楽しさがあるからであろう、全員が目を輝かせていた。他の叙述では、先生は、付け加える、言い換える、詳しくする、言葉の意味を説明する、人物の思いを表す、言動の理由を表す、といったように、全体を通しても、各々の言葉から想像を膨らませるためのアプローチの仕方が多彩であった。このように、言葉へのアプローチの仕方にたくさん触れ、その有用性を感じ、それらが「読んで想像する楽しさ」につながると感じることも、国語授業の大切な部分だと感じた。

今回拝見した授業では、一貫して「全員」が「考えることを楽しんで」いた。これまでの学習の積み重ねや、一つひとつの緻密な教材研究があってこその授業だと思う。

最近は「主体的な学び」をテーマにした研修会や研究会に参加することも多いが、なかなかその具体像をつかみきれないでいた。まして「教科の本質に迫る学び」との両立が意識になければむなしい。子どもの「好き」に授業展開を委ねることが主体性を生むと語られることも多いが、それとは別の意識として、「全員」が「考えることを楽しむ」ためにどう授業を仕組んでいくかが大切だと教えていただいた貴重な時間であった。

（野洲市立北野小学校）

合同研究会で感じたこと

少徳　信

今回の発表者の皆さんに共通していたことは、子どもの思考に寄りそうことだったと思います。ふり返りを中心に子どもの思考を読み取り、意図的に交流の場を仕組むことで子ども自身が新たな発見を得られるように工夫されたご実践、付箋を用いて子どもが書きたいこと・伝えたいことやその順を明示されたご実践、物語の主題を中心に、その物語の値打ちに迫っていかれたご実践、これらのどれもが、子ども達が自ら学習に関わっていくようなものになっていたと思いました。言葉の力を高めることの大きな土台が、自ら言葉に関わる学習活動であると改めて考えさせられました。

ただ、子どもが自ら言葉に関わるということは、何も教師が見守るだけというのではないようです。特に「ごんぎつね」の小川先生のご実践に代表されるように、一人ひとりの学びの現在地を確かめながら、適切な学びの場を保証していくことは、子ども達が最大限力を高めるために必要不可欠なものであると思います。このとき、どんな子に目を向けるかが重要になってくるのではないかと感じました。「良い授業」の中には、「そんなに深くまで読めたのか」と驚くような授業も含まれると思います。しかし、このような授業ばかりを目指していると、いわゆる読める子が中心となって授業が進んでしまい、国語に苦手意識を持っている子が置いてけぼりになったり、子ども達が教師の想定した答えを当てることを目指すようになってしまったりする状態に陥ります。国語が苦手と思っている子に焦点を当てて、そのような子が国語の楽しさや言葉の豊かさを実感できるような授業こそ「良い授業」なんだろうなと今では考えています。

吉村先生のご実践の中で、国語に対する意識のアンケートがありました。点が取れるから好き、嫌い、答えが定まらないから苦手といった回答が多くありました。子ども達の意識は、できる・できないといった自分の国語の能力に向いているのだろうと感じました。もちろん、「できるようになった」という感覚は非常に重要です。しかし、それと同時に、「読んでいるうちに新しい見方が発見できて、読むことが楽しいと思った」「一所懸命書いた文章が、相手に伝わった」といったような、言葉本来の役割や値打ちを感じるような経験も重要だと思います。この様な経験ができるような授業も目指していきたいと思いました。

（彦根市立高宮小学校）

俳句と自尊感情

少徳　信

8月9日、10日と国語教育全国大会に参加してきました。その中のワークショップでは、一スタッフとして関わらせていただきました（主に黒板の前に座っていただけですが）。参加くださった方の姿を通して改めて教材としての俳句の良さ、言葉としての俳句の良さに気づくことができました。俳句の学習を通してどのような言葉の力が育つかについては紙面の都合上省き、ワークショップのテーマである「自尊感情を高める」ことに俳句がどう貢献しているかについて書きたいと思います。

まずは俳句について簡単に説明します。俳句の特徴はなんと言ってもその短さにあります。五・七・五の旋律は、人によっては入れたい言葉が入らない不便な器のように感じるかも知れません。しかし、この短さが俳句を芸術たらしめているのです。どういうことか、長編小説と比べながら考えてみましょう。多くの場合、長編小説は何万、何十万と言った言葉から成り立ちます。いくつもの言葉が折り重なって美しく、あざやかに景色や心情、人物像などを映し出します。カメラの画素数が上がれば上がるほど、緻密で色鮮やかな画面になるのと似ているところがあるかもしれません。一方で、俳句はそうもいきません。音数に制限を持つゆえ、いくつもの言葉を用いるのには無理があります。しかし、心情や光景について、表面的な表現しかできないわけではありません。次の句をご覧ください。

「夏だいだい筑波に集う先生方」

この句の言葉からは、夏だいだいがあることと、筑波（この場合は会場である筑波大学附属小のことと捉えて良いと思います）に先生達が集まっていることしか分かりません。では、この句から分かることはこれだけでしょうか。きっと、多くの人が先生方の生き生きとした会話や議論の声、再会や出会いを喜ぶ表情、会場に置いてあるのであろう夏だいだいの甘酸っぱい香り、それらをすがすがしく包む青空などをイメージしたことでしょう。言葉としては書いていないこれらの情報が伝わってくると言うことは、私たちは書かれていないところまで補完して感じていると言うことです。つまり、読み手が、季語を中心にそれ以外の部分とのつながりを一所懸命に想像し、足りないところを創造的に補うことで、俳句は初めて一句として独立するわけです。これこそ、言葉としての俳句の魅力だと感じます。

この「足りない部分を想像して補う」ことを、学級の中のこととして考えてみましょう。句会等で、一人ひとりが句を提出していきます。点盛り（得点集計）をして、子ども達が自分の選んだ作品の講評を始めます。「ここの部分から、～と感じた」「～のように思えてきた」といった言葉は、子ども達がその句を、ひいては作者のことを必死に分かろうとした結果生まれたものです。もちろん自分の句に点が入ることも嬉しいですが、自分のことを分かろうとしてくれたことがどんなに嬉しいことか。自分の句を感じ、分かろうとしてもらえた喜びは、必ず子ども達の心に積もるように残っていきます。このような喜びに満ちた心を持つ子ども達は、自分のことをだめな人間だとかどうせ努力しても仕方がないなどと思うはずがありません。俳句を通して認め合った経験が子ども達の自尊感情を育むことに大きく貢献することは言うまでもないことでしょう。これが教材としての俳句の大きな魅力の一つです。今回のワークショップでもそうでしたが、参加者の方が一番いい顔をするときはみんなの句を鑑賞し合っているときです。以前吉永先生が「何かを言えば反応がある、工夫をすれば認めてもらえる、良いことを言えばヒーローになれる、そんな雰囲気のときに国語の学びが楽しいと思えてくる」とお話しくださいました。互いの句に反応し、認め、句が選ばれると誇らしい気持ちになる、俳句はまさに楽しみながら素晴らしい経験ができる教材になり得るものだろうと感じます。

子ども一人ひとりが学びを通して人として成長していく、教育が根源的に目指すものを再確認できた時間でした。

（彦根市立高宮小学校）

編集後記

▼五〇八回例会は第49回国語研究集団合同研究会「新しい国語教育の在り方を考える」（八月四日、仁川学院中学校）に参加する形で実施。三提案（竹の会・東風の会・さざなみ国語教室）を通じて深め合い、研究総括は西勝巳氏（関西大初等部）、記念講演は多賀一郎氏（教育アドバイザー）でした。▼さざなみ国語教室から井上滉斗さん（日栄小）が「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践・2年こんなもの見つけたよ（光村図書）」を提案。生活科の時間の地域探検体験で見つけてきた「すてきな」場所やものを伝えようと、組み立てを考えて書き、読んで伝えるという学習過程を提案。司会を北川雅士さん（県総合教育センター）、指導助言を蜂屋正雄さん（祇王小）が担当しました。▼低学年での合科的指導の在り方やカリキュラム編成や書くこと学習過程（一人学びと全体の学びの場面）での指導の在り方の検討が協議の柱となりました。▼書くことの活動で言葉による見方考え方が高まるとは？との「問い」を実践を通じてさらに深めていきたいものです。▼なお同人の好光幹雄さん（膳所小）は八月十日第87回国語教育全国大会のワークショップで「自尊感情を高める俳句教室作り」のテーマで模擬授業を行い、吉永幸司氏（当会主宰）が解説を担当されましたので報告します。▲巻頭には、片桐宏様から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。

（森　邦博）